

## ◆ 人権の歴史／奴隷の歴史

いま滞在しているアメリカの大学には、「人権の歴史：1945年から」というタイトルの講義（週に50分×3コマ）があって、これに出ることにしている。二人の教員が担当する授業で、月曜日と水曜日にそれぞれが1コマずつ講義をし、金曜日の3コマ目には2教室に分かれてディスカッション中心の授業になる。このようなタイトルの科目が歴史学科で開かれていることにまず驚いたし、そうしたテーマの授業において、促さなくても次々と質問の手（や指）が挙がる教室の風景も（以前から聞いていたけれども）やはり新鮮だった。このテーマは担当教員の得意分野というか専門分野なのだが、それ以上に、この科目ひとつとってみても、ここでは歴史学が確かにリベラルアーツ教育の重要な提供学科となっているということが分かる。歴史学科のある先生は、社会科学系の学科を指して「（学生を奪い合う）競争相手ね」と言っていた。自分が専門として名乗っている「歴史社会学」がアメリカでは（独立した研究領域としては）最近あまり名乗られないようで残念な一方で、歴史学科から提供されているこうした講義の意気に共感し学ばされることも多い。

副題の「1945年から」というところが挑戦的だ。授業で扱う「歴史」は過去のものではなく、より現在の私たちに近い「生きた歴史」だということである。

つまり1945年「から」ということで、帝国日本やナチス・ドイツの敗北によっても終わらなかった問題、そして敗北したことで明るみになった問題を扱うということである。それはいわゆる「人道に関する罪」を規定したニュルンベルク裁判の年であり、授業では、東京裁判やいわゆる「従軍慰安婦」問題も、その絶好の「教材」となって（しまって）いる。

教師がパワーポイントで「慰安婦」「従軍慰安婦」「軍慰安婦」「性奴隷」「軍性奴隷」「軍売春」「強制された軍売春」を並べて示し、それぞれ用語のひとつずつ、どんなニュアンスがありそう？などと聞くと、いろいろと手が挙がる。この授業では、従軍慰安婦や戦争時の虐殺、強制労働といった戦争犯罪から、人種差別問題・民族自決権、男女差別や性的マイノリティなどの議論までが、「人権」という言葉で一つに繋がられてゆく。日本に関する問題も、「事例」「教材」として扱われている分、自分が日本国内で読んだり聞いたりしていたときよりも普遍的な議論の土台の上で考えることができるのが新鮮だった（というか、そう考えるよう強いられる）。

例えば、「慰安婦」にされる際の軍や政府の直接の関与、特に強制的に連行されたかどうかという論点は、日韓関係においてはともかく、（その当事国ではない）ここではあまり意味をなさない。そもそも「人権」の見地から言ってしまうと、たとえ政府や軍の直接の関与を示す証拠が見つからなかったとしても、少なくとも「黙認」はしていたということとその問題性は明らかである。「直接の関与はない」だとか「事後法だ」とかというのは、ここでは言い訳にしか聞こえない。この授業では、敗北したゆえに問われることになった「戦争責任」ではなく、より普遍的な問題である「人権」を扱おうとしているのである。また、

そもそも「慰安婦」という言い方自体、「慰安」される兵士側の視点が念頭にある用語であり、ここでの視点からすれば、問題は「奴隷」的であるかどうかということ、あるいは「性奴隷とは何か」ということである。

大まかにいえば、いわゆる「従軍慰安婦」などの戦争犯罪の問題を私（たち）は、戦争責任論からの流れで理解しようとしている。そして歴史認識論（自国の歴史とどう向きあうか）という課題設定がなされ、他国（民）の歴史とどう折り合いを付けるか、という課題へと繋がり、そこにみられる隘路を越えるためにトランス・ナショナリズムへ、というように議論は進む。

けれども、それらは戦争、つまり国家の枠で敵味方に分かれるものに関係して起こったできごととされるがゆえに、それを論ずる議論の構成上、ナショナルなものの関与は必須となる。そして良くも悪くも「国」の境界線を前提にした議論がなされる。「良い／悪い」の区別が、国と国の関係、国民と国民の関係にむりやり一致させられてしまう。その問題性に気づく人々は、それを何とかずらそうとしたり、ときには「ナショナリズムを越えて」などと提言したりするが、やはりどこか違和感も残る。ナショナリズムの根深さや逃れがたさへの洞察がなく、簡単に「越えて」といつてしまっているようにみえるからだ。

けれども、「人権」という出発点は、議論のあり方を「自国／他国」に強く規定する「国家・民族」という枠組みを簡単に括弧に入れてしまう。そうできてしまいさえすれば、問題はすごくシンプルになる。そして「人間」「社会」という、もう少し普遍的な土台のうえで議論をスタートさせようとする。結果として、思わぬ盲点も浮かび上がってくる。

つまり、もう少し踏み込んでしまえば、日韓併合によって朝鮮半島の人々も当時は全て建前上「日本人」であり、そこに今のような「自国／他国」の区別はなかったことが重要になる。この授業が示しているような規準に照らしていえば、帝国日本は「自国民」を「性奴隷」にしていた可能性がある、という問題を考えなければならなくなる。逆に言えば、敗戦によって韓国と北朝鮮が独立したから、これがナショナルな問題として浮かび上がってきたのだけれども、それはむしろこの問題の本質ではないのではないかということだ。例えば、「日本人慰安婦」はどこに行ってしまったのか？ この問題には、いまだ不可視の部分がかかなりあるはずである。

「人権」にアメリカ社会が敏感なのは、それが「自由」を詠う社会であるということと同時に、もちろん「奴隷」をめぐる罪深い歴史を背負っているからである。この国では、リベラルアーツの一学科としての歴史学科の授業であっても、というか、だからこそ、「人権の歴史」という授業が必要とされるのである。

もちろんここでアメリカ合衆国的な、あるいは国連的な普遍主義の「すばらしさ」を語りたいのではない。ただアメリカで「歴史」というと、常にそうした普遍性の規準に照らし合わせて提示されているということで、これもまたひとつの歴史との付き合い方だということだ。「関税撤廃」ではないが、それはそれぞれの歴史の文脈を形作る固有性を無視し、普遍性の「光」を当ててそれを検査しようとする。すべての歴史は現在のための「教材」

なのである。それゆえにこそ、この国で歴史学は社会科学的な見地が総合されるような学際性を持ち、現実問題に対処するために学ばれるのである。

それは「歴史を体感すること」にとってどのような意味を持っているだろうか。改めて言いたいのは、日本の歴史を学び語ることに於いて「人権」や「奴隷」をイメージしにくいことが、歴史の「体感」にとってどのような作用をもたらしているかについて考える必要があるのではないかということである。別の言い方をすれば、「人権」や「奴隷」が「分かる・見える」とは、日本の歴史においてどのような意味を持っているのかということだ。それを考えない限り、「慰安婦」という言葉を使ってきた人々にとって、「性奴隷」という言葉が突きつけられていることの意味が分からず、困惑するのみとなろう

日本に「奴隷」はいなかったか？ もちろんいたし、高校までの歴史の授業でもそう習う。『後漢書』の「東夷伝」に「生口百六十人を献上」とあることを覚えている人も多いだろう。彼らは誰だったのか。そして古代や中世でも「奴隷（隸属民）」を表す言葉がいろいろと出てきた。ただ、高校までの歴史の授業では、最終的にはそれらの「意味」は誤魔化されてきたと言わざるをえない。だからそれら歴史用語はバラバラなままで暗記するものでしかなかった。もちろん、それらを繋げて理解するのは相当な見識や研鑽が必要となるのだけれども、そうした探究もまた、歴史を体感するための物差しのひとつとなるはずである。(続く)